

和訓栞

祢乃之部

廿三
廿三

津田文庫
文庫 1
1604
20



天文の比の我母の林宜氏あり儀式帳より林宜氏无絶事とも大神宮林宜氏荒
木田神主等と云えり又林宜神主首名忍人等始叙爵為天平廿一年の先規
録より也○神ハ神宜のてりいりり諺有朱子の説は後世人心奸詐之甚感得奸詐
之氣微得鬼也蕪巧と云えり○万葉集にたけさといくく秘をたまひとらふまは
旁の云也其意豊後風土記より云えり初と名通り鴨長明より云
秘と云ふ名と云ふまは云々云々干と云ふ秘といはふまは云々

○葱とりあり本名とて根を賞するとのまるとして根葱といふ之和名故より文
葱ふゆと云ふはまは云々云々根深の云也禁裡女中より大根と云
秘と云ふ 日本紀に勞字慰勞字ふと云ふまは云々○雄略紀の慰礼國と秘と云ふ
ふと云えりまは云々大なる諺に慰れハ百濟の旧名と云ふより東國通鑑より云
通證より考へて云々云々ぬるとして云々のまは云々

△秘ぐさ 埒と云ふまは云々の寢座の云○秘ぐさと云ふは云々○秘ぐ
らの雪といふは白と云ふ毛の落ると云ふと云々○伊勢多氣郡に根倉村あり
稻倉の云々式に櫃倉神社と云えりも根倉の誤らるる根倉物忌といふも

えと云ふ

秘ぐさの髪 髪は髪髪の子也今より秘ぐさの髪也古今六帖枕草帝のね
ぐさの髪は云々と云えり拾遺集より

と云ふと云ふ秘ぐさの髪と云ふ澤の池の云りて云ふるか云々云々
此池よ采女が身あけするぬまの和物語より

△ねけ 日本紀に揺字と云え又抜取と云ふより古事記に根こいといふた
と云ふ根より云ふ根と云ふと云ふ

秘こい 猫といふ渡子の云猫好獸也と云ふ猫見あり云々倭名抄より
秘こまといふ靈異記に狸と云ふり○琉球に異色の猫あり隱岐國の竹島に
猫の此雲の猫といふ異色と云ふり三毛の花猫といふ室永乙酉五月に江戸大友保某の家
の猫二頭六足二尾灰毛の子は産と轉猫の源氏よりゆ蒙頌也又木集より
敷といふやと云ふぬ唐秘を君を為りて云々云々

時秘に金華猫也麴麴香猫の靈猫也と云ふ○諺に猫根性といふ人の此

くよ菅家万葉

さえつた先根刺とくわむと書海と竹の園生とくけまふうぬ
是の孟宗の故事とよきり

孫ざを

孫覚とちうらひて目のさむるあり定家卿

ひうたふ孫ざをの室よきくんりうらぬ月のまうり

○孫ざをの孫孫ざをを多の救くと孫玉集とあり○孫ざをの里の義濃惠奈郡
あり孫覚の床の絶景也仙境とて浦島ノ故事とていふうー孫崎の本曾越と
山さやの孫ざをの床のさひーたれたと音あふたまうらぬ
とらふやの世取のよせやとらふ人もけりーとて西之帰とらふ孫崎の幸孫雲といふ
俗諺もとも信一むー辺衛攝政公のや

谷川の音ふゆたもむすりーと孫ざをの床と誰名けりまきん

薩州の孫覚氏あり平維盛の子六代年長とて子あり清重とらふ其裔也とらう

孫ざを

源氏とて四年三月とて正五九月六舟日といふやとらう長祚約と修年

三舟戒とてゆ

△孫ざめ

根台の不成一火隅の國と大ぬどめ小ぬーめとらふ山あり

△孫ざと

倭名抄と鼠ぬとあり竊盜の不成一一人の寝て後よくかく物と盗食ふ

その也増韵と虫似獸法苑珠林と鼠盜竊小獸夜出查匿とてえとらう子鼠ぬとらう
とらふ羽列と鼠ぬとらう○白鼠ぬ福とらう太平廣記と金玉之精とらう日本
後紀と山城國猷白鼠とて今甚多とらう色あり斑あり黒色あるあり光仁紀と
之ゆ○川鼠ぬ水鼠也水底泳く才魚の如く水鼠あり北方とらうと葵菜食ふは
鼠あり西域或は南海火州とてとらう野鼠ぬ偃鼠也野菜根を食つと鼠鬚筆とらう
とらうとらふ鼠とてとらふ安永丙申の復伊勢安濃郡の村里と鼠多稻穂のとらうと喰
切とらふ長田鼠ありとらふとらふ竹鼯也玳瑁鼠ぬ鼯鼠也大鼠ぬ碩鼠也大坂肥後藏と
大鼠ありとらふ猫三匹ぬ喰ひ殺せとらう黄鼠ぬ鼯鼠也鳥鼠同穴山の鼠是とらう
とらう麝香鼠ぬ香鼠也長崎後藤町とて孫ざとらうとらう住昔暹羅船末時と附末
とらうとらう梁各と倭國有山鼠如牛とてとらう安永乙未の冬美濃とらうの辺とらう
大鼠如大もの出とらう安藝國と六足の鼠あり○群鼠海に渡るとらう才夷堅志草
木子ありとてとらう日本紀とて記せり○永正四年と武藏相模と鼠多とらう形蝦

かきし人とし書經に懐人としる万葉集よ

あつこのくわてかしの二おもふもかかつともおちけんの友

△根づ 江戸谷中よ根津権現あり是甲斐の士根津其君に諫て死とすく奉祀

す文照院君の時也大坂陣よと根津小五郎と太平記より武人の姓也信濃佐久郡
の大姓也鷹のまよと通しる者也鷹の羽と續々と根津始より也

根つゝ 俗語也涅の音に取用する成り水中馬主に注せり

根つひ 根着の成り一墜子也とらり

根つゞと 日本紀に哭泣或發哀とよめり誓の辭也音番の成り一或哭奉仕の

根つらり

△根てのあまけ 山腰ての朝明の成也

△根とり 森々の鳥也鶴をよみ論語に宿河よとらり根鳥の枝と争つらり壁一盛

衰記よええとらり○根とり狩の早朝に伏る鳥は狩也とらり○吹物よらり音取
の成也

根どころ 日本紀に惟内とよめり寝所也○後撰集に根どころとらり

△根の成りかたとらり○万葉集に寝所と根とよめり

△根あく 神代紀に啼哭とよめり音に泣也又鳴声を根あくともよめり

△根やう 豊後の方言老婆とらり

△根ぬふり 根尊の成り根が長く引て生ふる浮草あれは成也教よ多く寝

ぬふ寄とらり

△根く 東路より生見沢林せり寝の成り

△根のび 正月初の子れ日野にさよとらり小松と引く根は子の日と根延よとらり

根がよするあつ小松も又子松の成り取らるる菅家文章に嘗聞干故老曰上
陽子日野遊厭老とええあつさよとらりの事あり錦繡萬花谷に正月七日登

岳遠望四方得靜陰陽氣除煩惱之術也とええ董一助答問よも歳首折松枝男
七女二以為樂飲之とええとらり

△根のこ 源氏に根のこいつはわらすかんとええとらり是は源氏紫の上と新松の

夜成の日にく其次の夜へののこれ日よあつとらり三日の夜の餅をせつとらり日ほ
をい子のこれ餅とらり

倭名抄に「根殿」も「下」等して小座とらひ遠江にて「根」を「根」に○「根」の義
 もあり越後國矢浦の海中に圓うまきくくくく百餘間の大石ありて根矢の鋒立と
 名く○土左の口語の結末に「根」や「根」なり神宮の詞も「根」なり○「根」の「根」
 は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり
 さて物おりの「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり
 「根」を「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり
 此の夜の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

其の夜「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

今此「根」は「根」なり○「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり
 多くある「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

「根」を「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり○「根」は「根」

「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

「根」は「根」なり

「根」は「根」なり伊勢物語の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

名本に見え根と兼より源氏総角は琴教たる所も此辞あり音は「根」を「根」なり
 集も「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

の鐘也

「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

同じ史記に良與客祖注に伏伺也「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

野宮殿の説也「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり
 より侍りて大津練貫と庭訓にも載たる此名水は「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり
 毎日「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり「根」の「根」は「根」なり

祇つか保

日本紀に鉄鍔とよめり倭名抄に祇つか保とも云ふ練の糸なる

○新撰字鏡に鍊をよめり練金なる一延喜式に下総國より鍊金と貢せし事
見えし

△保乳

寝ねと保ともいふ寐も同一○茶物に煉と云ふ金鉄に鍊と云ふ縮

糸に鍊と云ふ煉鍊練通一用う泥と保と埒也○徐安ともいふ田舎の保の日記
に面白西人保と云とめつしき事なる一奈良の都と保といたが子と云えたる
により實朝公加茂の事を保つた子と云ふもよめり今も祭禮に保つものなる
しふ是之夫木集也

九重よたたる玉のゆりしより傾くはそこの保つのがか那

月御長裾と曳ははす又保つよちやぶらうといはる詩の委也

△保身

△保ろ

万葉集東千よるも新六帖に箱根の保ろふともよめり根のそとと云ふ
ろの助け詞ある一保の條下に詳なり

△保る

比良の保るるふとよめり比良の嶺より湖水一吹はる風とらふ也

比良の保るるふとよめり雪あつとらう

△保ぬ

子変神の泉別塚の南庄にあり親長記に子変御前と云或は子祀神とも
いふとく如意神祠とて神功皇后の如意珠より出する号也今在記に彦火と出見尊
ふつとらう

△保え

△保かびせ

源氏より君の保かびせてまゝたまふと云えしう夜啼客竹とらふ也

倭訓彙前編二十二終

倭訓彙前編二十三

洞津 谷川士清 纂

乃之部

の 中の助の辞も多くらう二語を一語と熟き一も助辞也と之字とよきり
 日本紀古事紀之字と句中語未用也美馬の如きものありて一家の体とせ
 又之頃之の之の如く所成神ナリカミ之者也ナリ序り又古の体の言よりらまきて用
 の言より之といふも一もらうる國常立尊天御中主尊も古事紀の國
 之天と之をいふ他も例として觀一〇播磨の平語の終に凡てのらう京師のふ
 同〇楚辞の鳴玉鸞之啾々又神高馳之邈々の語助也又戰國策の楚
 與不注の猶於也と之をいふ上よと下よと字と下に置時と其中間之字と並是
 文法也といふ〇近江のや信濃のや泊瀨のやの類を野と也す助也也莊子と地
 名南沛或南之沛といふ如くはよきものありて一もらうのや一豊ふといふ山と
 かよきものけたるとかつとやたりまきとやあすてあといふ意かりたりとい
 〇仁徳記の磐之媛とある之も助辞也今の俗呼よも之をけりといふもの多し

論語孟之及孟子尹公之他あり莊子之驪之姬呂覽之丹之姬と見えたり○野
とよむも彼此相通ふ意ありて之字は通りえさぬぶとらふ○日本紀は幅とよ
めり絹布の度也○筧とよむも矢の度なり一黒塗と用へ上差は水精の鑄あ
る平服より落矢まで廿一條也壺籠は七條也延喜式和名抄は笑とよありが
のさりのぬぐひのまのふあり○字合の字は五つあると難せしれ一事あれども
新古今集は七つありて月よたねとあり

やかれのさりの木の間のまのふは落つる月の影のさやき

○のてよりまゝ緩やま袋字紙よもあふとそてつづのうひふりれもの中
らふの秋の夕露啼むの字人皆いとこまよの字甚深の意味ありといふ
あけてえぬたゞまつとのつづの字もたゞまつとそとあるあれこの字はくつひ
てげゆと超嶽院の所説也といふ○初五の句よ伊勢物語よふのまの字二の句よ
古今集よ我やゆのいとよひよ才四の句よ月とんよそのあまのちよと續後
撰集よえての字はくすの体優よま長き一結句の末よのちある古今集
ようつりもゆり人の心の拾遺愚草よゆちぬ月のわりのふく連人のちよとく

まのふとえはとらう○書ふにふけのむのうけらあやうの秋つまのふうあふん
らの秋の夜ふとあるといふこの約信也と譬喩の助辞は用おしもあり佛足
石の字はつひのもあれとよえもあつた詞也といふ今の口語よとあり○体の語と下
よひつゝる時よのち置也秋の語よ用と体よといひたすふひされ用の語
よとらう○書ふの秋の夜ふとあふと秋の夜とあふと秋の夜とあふと一節の中疑
ひの辞ある一疑いとらとあふと一唯又ととのてのちよあり蓬とよと松虫
のふくおもひ渡るとらふ人のちよのちとらう○荷とよむにの轉語也荷前
荷持田のちとらあり○洒乃乃の假名よ用とら

△のあへ 日本紀は野饗とよまたり

△のいぬ 野豹の字也○犬蓋のまよふれて野に在て人と魅するともいふ病

源候論は野道と見えたり

△のいすゞ 倭名鈔は肉刺成よありのいすゞのき也芒刺をいすゞは墨也刺字意

也由着靴小相措而所生也といふ今いすゞとすゞと

△のう 神佛の事より以下方の能あふ事成つてて舞とらうとらうより能

とい名けしやわどくよつけく能い必ず有つて也と体源抄もといつ將軍義満公の時観世世阿弥しらすもの起りしつゝ其始め神樂よたつて神事よ勤むよつて大社よ九て其座より観世茶川勝々裔より樂家也とて又太平記よ毎日酒肴調く道々の能者よとて或る集めて其藝能とてて座中れ真をともよかゝるる三代實録よ雜伎散樂鏡尺其能とてる意あり○禁裡の御能い常人勤む四座の猿樂い召せし舞臺の紫宸殿の南庭よ北面よ建るあり○藝能の字に北史よえ也○南都新の能い寛正五年勸進能の圖の舞臺は式よ同一今も同一かゝり大臣服あり其烏帽子よ調度懸の組と公方家より賜つる是はけて能の露拂ひをを初能といつて脇能といふと此系也といつ○口語の發語よといつ

△のえふと ねえふすの同一樞とよきり委卧の義也

△のどろく 野と焼也春の事と藝林代山よ野焼日膠火とる也

△のぶふ 神代紀よ脱免常と遊とよりかゝる互いぶふとらよ意通つるのぶらぶらとらふらふ互る也○えとよぶらぶらとらふ

のがみ 牛馬よらふ野飼の義也寮詞國詞ふとよ對しつて野よと

よきり延喜馬寮式よらふ放飼よ同一

のがけ 大諸禮よ花見すの時原々山よとらふまの幸也といつ今と

らふ詞也

△のき 和名枚よ檐とよきり又宇字軒字とよきり退の義あり延喜式よ

榮と訓せり禮記注よ屋翼也とるん

のぶ 新撰字鏡よ芒とよきり芒刺とらふ也○古事記和名枚よ艘と

のぶとよきり骨艘也○芒目とらつて天目の名よも呼ぶ○古胎よのぶの

あるを胎刺といつ○野木社下野國よあり小山朝政志田義廣と義い

し取也

のぶ 簷端の義也○のぶの山のぶの岡とらふやうとらふと

○新撰字鏡よ蛙とのま虫と訓せり和字よら

のまらう 鷹の詞也言塵集よまよとらふとてとらふはらう又それたるをとい

ふ也といつ退羽撃の義成り金葉集よのまらうつ真白の鷹の餌袋とよめれ

いかつふさる鷹をいさるといふ秘鷹傳の注に鳳輦の左の隅の柱はめく
つらふと見えたり

△のこ 退去の意をぬけることありて新勅撰集より人のおのこ
よそよりくる軒端と人のおのこふれのこことありて武烈紀の手よのここと
よそり

△のげ のこれ信語也
竹取物語よえ仰様の名成り一のけよたつてあつたり
枕草紙よのけくひまるとそののけえりばらふあり

△のこか 残れよりのこといふ令残也各経に貼けよ新撰字鏡に餃よ
○のこか菊のこる雁のこよあり菊のこ雁の常世の鳥なり也佛
足石れ秋よはのけくんとよみと遺跡のこ也○残鳴の筑前早良郡の
これ浦よとい朝野群載刀伊国賊の太宰府解よ那珂郡能古嶋と見えたり
後蒙古と據たり

△のこ ぬこよ同一新撰字鏡に雉とよみ扱也注せり靈異記に捫とよめ
と拾遺集よ

△のこ 残れ夜也曉といつ夜のけも同一夜と扱す目きく夜の明
ぬ意也

△のこ 母名扱よすと評してのこありてのここといふのここといふのこ
をいふ揚の意のこをいふことあり大諸礼よものまけく見えたり

△のこ 太神宮式よ調荷前とよみ祝詞よんかともよめれとのこ成り
萬葉東人の荷向篋の荷の緒と是也江次第注よ荷前者四方国進御調荷前
取奉故曰荷前とよみ○續日本後紀に歲竟分練号曰荷前と見えたり私記よ
先祭神祇号相嘗祭後奉山陵号荷前也十陵八墓よ幣帛とよみここと
朝野群載荷前幣物請文よ山陵七十七處墓三十六處近陵十處とよみ
是崇徳院二年の制ふれ時代よよりて其異ありまよ一貢物の荷の
ここといふことこれ山陵の名目とありて後のまふ

△のー 日本紀倭名録に射斗とあり古語評に伸帛之器と云えり
 楊升庵集に鈿鈕あり今火のーとあり○のー艘とのーの常とあり
 平治物語に打艘と打のーのものーとありと云えり大諸禮よけは
 のーと云えり延喜式より長艘とあり東鑑に例進長艫千五百十帖と
 えり今もり人家祝賀の要物と手伸の又延長のを取るー伊勢
 のみ成ー

のーの 桃花菖葉のーの綾又云り今経の練糸緯の生糸のまぬの名
 のーのー艘の形よ目次引く賀服とす成ー

のーの 太平記に左衛門佐の兵と云る菟白の成と云えり
 よきけり意成ー○野代宮の儀式帳と云えり

のーの 野稻の義陸田の殖と云て名く又梵天米と名く南蛮より來り
 て之種あり糯ありて其粒長大と云る潔白なる能登七尾の清水米の
 蘇頌所謂香粳とや○近年清朝より渡る所の稻一の赤と云く一

とに穀と云

のーの 太平記に常法の四品以下の平侍武士など関板打ぬのーの
 家よと居ぬと云るあれと云由伸菅と云ー當時に諸大夫と云武
 士の家い板菅菅と云る武藏守師直との棟門唐門等の造制
 成非と云る

のーの 伸單の系紅のちたる縮也と云枕草帝と云ーのひと對
 てねぬと云るのーのひと云る女官飭妝と云る
 ひと云ぬを云る

△のーの 神代紀に野薦と云る口訣に芽と云る私記よもす
 薦の薦と通りと云る今も竹也と云る○琉球よの今神幣の柄と云る
 と用る雅と薦の黍蓬と云る近

△のせ 倭名録に鶴鶴と云る野見鷹の畧と云る鳥成と云る廣雅に鷓鴣の属
 也と云る○能仙の城の美作國と云る
 のせと云る 撰列能勢郡と云る禁中と云る献る所ののこれ餅也のこれ條と云る

△のそ 較と播州のそとらふ又のそ鯨と称するあり鄙俗にゆゑ過る性質の
人故のそんといふ○まろと鯨と相似し

のそく 除とよめり去退の義あり日本紀に蠲消とのそくぬしとせり
さ也兩居友よもええより○規とよむ臨眺の意なる一中務集に池よのそく
たる松よ菘のゆりるとええ源氏よ水よのそくたるそくもええより圍基よのそく
觀字也○出羽よのそくといふ淡黄也又さしああり及はとせり

のそむ 何とのそむ望也何よのそむ臨也其時よめりさしあも古語あり臨産
の如し靈異記よ伴とよめりとのそむも新撰字鏡よ規又願もよめり

△のだ 野田也新拾遺集物名よのどろるまづとよめり西土よ野田といふまづ
野と田と二頃也

のどろち 野太刀とちり埃囊杖よあしとちりたしとせり異体よのどろち
とスえより倭名録よ短刀ハ刺刀也とて訓せり物の後代よ打刀腰刀とちり
類るる螺蛸時繪等の野太刀とちり物の或ハ平鞘或ハ毛抜形或ハ草緒或ハ
衛府劔シチとちり是より東鑑よ武の太刀とちりよは表東略杖よ武家

△のち 表冠の時野劔或鞘卷の劔が帯せしふまづ参内上殿の節ハ殿上の口
よ解劔のよ也といふ今軍家よの常の佩刀よハ大よ長くて刀量ハ人
の提る処也大太刀とちり長太刀とちりる物よ軍中よハ兩刀の外背よ負しとちり
いり武備志よ大制といふとちり○のどろちとちり俗語ハ草木とちり
野とちり成

のそまろ 宣字曰字とちり新撰字鏡よ諭とよめり神諭ふとせり
より告たまふの略也のたまふこといふいふ反ふ也のそまろとよむ古語○
大殿祭の祝詞よ宣志久とちりいふとちりいふとちりいふとちりいふとちり

△のち 後とよめり物よのちせしとちり同○天子と称しとちり後字と
用かへ後一条院以後の例也院号ハ冷泉院より已降也○神代紀よ苗裔と
よめり今もいふ語よ後胤也○寛平熱田縁起よ日本武尊随逝水時年三
十仍号其瀨曰能知瀨能知者命終之詞也とちり○のちせのい若狭り

のち 野路也名所よらふ近江狼川の邊也野路の玉川也路の條原ふとちり

ええり

のちみつき 閏月とよむ日本紀とるえり漢書と後月とるえり○九月十三夜ともいり仲秋の月と同じくおふともて中右記と保延元年九月十三夜今宵雲清月明是寛平法皇明月元双之由被仰出仍我朝以九月十三夜為明月之夜とるえり躬恒集よ延喜十九年九月十三夜との宴せよまたまふりといり菅家文章秋夜の詩と九月十五日と注す北野縁起よ九月十二日とゆる或の説よ源氏夕霧の巻よ十三夜の事あり一系院の時より始る金葉集以後多しす鄭女谷何大後と詩と九月十三夜と賞するものあり明十二家詩とるえりといりされ何大後と集とるれ八月十三夜の詩也田家四時占候諺語と九月十三時針靴掛断繩といふまふり月見の事いふけと晴と期する者ありとるも家隆と

△のつら

神代紀よ野槌とるえり草の神靈といふ也○本朝文粹村上天皇御製古調詩よ又有異跡者名号為最明野鏡誰得辨暇墓尤耐驚とる

ゆ新撰字鏡と蠍と訓せり又蝮とよる或い山深とよ碓の如き蛇ありとるも野槌といふ伊勢にてのつらともいふ何よとも音と聞ていふすよりやあよ足ふけをいふと熊野の山よ多一人と整せば傷腫すよと杵火と焼けい其音いふ集りて火よ投し死すといふまふり蝮と訓とる成といふり碓石集よ深山の獣の名とる○下野の国よ天麻とのつらといふ

のつら

祝詞とよるる宣言の事也古事記よ詔戸言万葉集よ能里等其等とるもと略してのつらともよるり中臣校よ天津祝詞大祝詞とるえり万葉集よもふりといふとよるる業資王記よ祝詞者祝彼神德告此敬意也といふ神祖の詔賜一御言と兼て兎屋命の宣申す也今集解よ中臣宣祝詞者時行事宣参集之社々祝部等也といふ神代のみまの傳ふれり天津のりといふ道饗祭鎮火祭ふとも此詞あり同○明月記よ祝僧とるえり北野といふ

△ので

△のど

俗語也野手のさふり
 萬葉集よ和字とよるり聖武紀宣命よものどよ不死と云とるえり
 ○俗よのつらといふもさふり

△のぬ

△のこ 板ふしと称する土佐國安喜郡上野根と云ふ所ありて薄板と云

せりとも

△のふや

野宮也齋宮よ立たまりんとすまふしやれ也式齋内親王奉入
時の祝祠よも三年齋の清まりてとも初齋院よ一年野宮よ一年まふ也
江次第難波三所野の宮とて由今一所ハ野宮宮邑といふあり伊勢の齋宮の坐は
ハ嵯峨の有栖川よあり賀茂の齋院の野宮ハ紫野よありとも源氏貫木の巻よ委
一〇左經記よ長元四年ニ齋院女房云朝夕御膳散飯等坐野宮時奉難
良刀自神とて由今伊勢度會郡奈良波良神社と云ふ一とらり今伊勢齋宮の
跡よ野の宮あり〇藤原公継公と野宮と稱す

△のまろ

文選よ嗶呻又軒言とよまり真名伊勢物語よ旬言と填る廣韻よ大色也
とて由今の俗高聲とてふ意也罵知の義よや新撰字鏡よ聒とよまり或ハ嘔字とよ
めとて字とよえと篇海よ嘔ハ熊虎色也とてえとハハ是と云ふ一或ハ詔とよあり
延の義と云ふ及ぶ也のむえと云ふもよえと云ふ及ゆ也

△のら

野原の義也野ハ阜ハ原ハ高ハ一て曠平なるがら也万葉集よ高野原

△のび

古語拾遺よ野火とてえとて藝林伐山よ縱火焚其草曰野火とて由
又燒汰よあり〇燐火といふも亦同ハ北海のたこ火湖水のまふ火東寺繩手の宗元
火伊勢阿濃の九体火ふと是也原路神の火といふも同〇蒼鷺朱鷺カハ羽
の光も火の如くともありこの樹上よあり〇伸といふも身とのびと名目よ
呼へとも屈伸といふがごとくあり

△のやう

延やうの義也悠ハの意也日本紀よ漲速とひうくのびとよあり〇聖

△のふ

弘字伸字延字とよまりのふともいふも亦同ハ陳展申暢序述宣
布の義も皆同ハ又のふと通ア〇信と名よのふともいふ伸と通する故に頃ハ
易の順信の義といふ言ハ述の義也〇備中ありよのふともいふありとも魚
と酔ともいふとて魚とよせて魚と採とのふ打といふ掬ありともいふ

△のふ

野伏の義山伏といふも意同ハ拾遺集よ健字法師佛名の野ふともて

細齒鋸也といふ○廿二載逆の者の刑ハ竹鋸ヲ用ゝといふ伊勢朝明郡杉谷ニ善住房あり元龜元年ニ信長公江州宛向ニ千種越を通りしより鐵鉋ヲ打りけし者あり後に至り天正三年九月善住房汝得々刑せしふ立ふり土中ニ埋み竹鋸より首と挽きしり七日より死すといふ

△のま 野間とあり又沼の俗語もいふ○薩摩の野間權現ハ姥媽うばとあり姥媽ハ唐人の船神とする天妃是也といふ

△のみ 助語といふ其意其事と他多しといふ終る語ふれハ耳爾已かといふ論語もいふ漢書の注ニ語終辭とす句中ハ管子に勿已スレバ如是トモ也注ハ不但如是而已といふ句首ハ莊子ニ已而為知者殆而已矣といふ又而已耳といふ連用せり多クハ已馬耳と用ゝ沈存中ハ而已切音耳といふ鄭樵ハ慢色為而已急色為耳といふ爾ハ耳と相通しちる事多し○蛭といふ人の血と飲の事も○新撰字鏡ニ鑿といふ事全浙兵制同○丸の事あり室の事あり眉公雜字ニ鏡鑿捲鑿といふ事木屑と香の事も俗ニ酒客と戲

そく左のあふといふの事といふ事也通エの具ニ鑿ハ左ニ持との事ハ飲の事ニ寄ていふ事○日本紀靈異記ニ祈とけいといふ事ハ香の事なり○叩頭と訓するも同意也古事記ニ能美之御幣物といふ事○出雲ノ野見郷あり野見宿禰の名の事なり也

△のむ 吞といふ事ハ通テ飲も同し○祈といふ事萬葉集ニ乞ひといふ事

△のめ 咽候をいふ香門の義也といふ事 船といふ事ハ温初ハいふ所以塞舟漏也といふ事

△のとせ 野も狹也といふ事○廿二載川録倉右大臣集ニんえといふ事 野中の水ニ影のうつろといふ事ハ匡房の説ニ徐君鏡ハ人の心の内と照しけし事ニ廿二載りてやかりしハ是更ニ我持しげといふ事塚といふ事此故事也といふけし事塚ニ埋しといふ事鬼魄によせて舟の鏡といふ事新古今集ニ

又龍山の野百首より

岡ののちよろろふよ放の聲や燈もりのかえりてん

燈のうせたる時竹もふせくし事ありとつり一説は飛火の燈もろしひ此等の鏡といふ燈と水よりつりて遠近の里數を知の法あり葺家の術也といふ

△のや

東鑑に野矢と見えたり征箭也といひ誤まり野矢は檠箭也或は野箭或は征箭負ふと東鑑と見えたり○庭訓に妻黒鏡矢と見え端の黒き鏡也

△のゆ

也○近江のや石見のやれ類の語助也攝津は平語の了といふ

△のよ

橋本邊の語末よりりよと同一

△のら

日本紀に野字郊野字とよりり万葉集に草字ともよりりらに取辞より取よのらふらと見えたり○出羽にてい畠の事といふ

△のく

万葉集巻首のクの家告用と見えたりら及也其次は名告佐根とありもさく及せ名のせのそ也

△のり

法則といふ告也宣也日本紀に刺字風字律字ふくとよめるも同一重

蒙漢韵と刑ととらり○秋とよむ多く佛法とせり後拾遺集よ

はのふのふふけいとのりなりぬあそひたりふとていそとけ

いふもまふもけいの声といひ狂言綺語の佛衆の因に白樂天といつるあり○

器物の寸法に内のり外のりふといふ類聚雜要に乘字と用わたり○海苔とけり

いふ莫告藻より出する辞より一皆滑るあるれといふよて堅けりの名もあり

延喜式に海菜とも見え○糊といふ海苔より出たり今も海苔の中よふけり

いふ糊の用よふといふ○日本紀に千箭五百箭とちけりいふのりといふを古事

記に千入五百入と作まり千篋入五百篋入のふいと略せり○名よ文をよむ藤

の文信あり義といひ藤義忠あり教といひ平教経あり御といひ紀御

因あり○血といふも糊の意あり

つらひ 賭弓とてり正月十八日の儀式也今とけいよのまよふとらふ詞あり

と乗字のふらふと乗算といふかける也よて今うけめといふ的申矢取合人

等矢等らり侍中群要よえゆ○獲者あり内裡式獲者毎的執白幡謂矢疎密

者くてもよやくとらり成り○賭弓の賭といふ錢とててくる是古禮也と増

鏡よえゆ

のろち 日本紀よ令字とよせり法言するの義とて又ち也日本紀よのろちとて
ともよせり又けりともいふこと又つて説文よ於文曰令為命令者使令也口者
出令也天不言亦以寐寤禎祥告之也とる也
つれあめ 法雨也梵書よても新勅撰集よ

法の雨よ我しやぬとてむりまにほの草けり
是ハ法物集よ紫式部く聖言とて源氏物語と造りたる罪よよりて地獄
よ墮ちたとい一日経とてすべしと人の友よえたりとせざる名とて源氏の
故ともいせざる表白一篇も是ありと契沖らり

つれつと 倭名抄よ式部省とよせり日本紀よ法官とせり
△のふ 宣告等とよむいけづのふ○乗の船馬ふよつりよ方のふなり
神代紀よ取とよむも同○罵詈とよむ乗のふ○似とよむもふ
と通つ和名抄よ名よ近似とむけりとも俗語よ似合たる事とのつと
り

△のまろ 神代紀よ似字とよめりみろとらふ如

△のろ 稻若水の本草よ麿草とよめり人踊ばとれの見物して目放とれと
らる本草よも獵人奔米則麿塵注視とらる平調曲よ皇塵草あると此義と
のろ 烽煙とらる野狼矢のふと西陽雜俎よ狼糞煙直上烽火用之と
えらり○今よ烽子とらるのろとらり也

のろふ 咒詛とらるふ及る罵らる詞とらる栄花物語よのろく
らるもええ台記よのろひのまよ打釘於愛宕護山天公像目とらるるも
兜ひまよの神木或は佛像よ釘と打すあり○のろひ負とらる伊勢物語よ
人の兜ふ詞の負物とやあらん負ぬおとやあんとええらるる物語よとて
人のけつふくいと年よ死ぬる也万葉集よ

ますとをれたらるひつあまらるひふけくむけさる負ぬるのろ
△のろのがせ 和名抄よ暴風とよせり野を吹分るの義也颯颯とも訓せり
野とれたらるらる八月はよあまらる山おろしむる者よとらる禮月令
よ仲秋疾風至らしむ孟冬行夏令則國多暴風とええらる疾風を訓とらる

くさう

△のお

△のゑ

△のお

倭訓栞前編二十三終



